



感覚デザイナー

ナー

茶屋休石

目覚めの感覚に異常がないにもかかわらず必ず時計を見てしまう。まだ不快な音をかき鳴らして眠りから呼び起こす時計が多くあった子供の頃からの癖だ。その頃の目覚めを懐かしくも思うが毎朝騒音で目を覚ましたいという願望は一切湧いてこない。目覚まし時計にしる脳内時計のタイマーシグナルにしるどちらにしる強制的に起こされることはわかりなく私ならばスマートな方を選ぶ。

上体を起こしたまま二度目をつむり息を吸い込む。冷たい液体燃料が毛細血管に行き届き細胞に浸潤していくようにして感覚や思考が冴え渡ってくる。一種の起床儀式のようなもので感覚が鈍いうちはベッドの上から起き上がる気になれない。

目を開けてゆっくりと息を吐く。これにて起床儀式は終了し、水分を求めて冷蔵庫へと歩き出す。ミネラルウォーターをコップに注ぎながら統合インターフェイスを開いて情報をチェックする。視覚上にウィンドウがひとつ現れる。レベル5以上の重要度の企業メール、私信、仕事に関する情報、ニュースの見出し。下部アプリケーションからの情報をメーラーの簡易知能が整理整頓して提示してくれる。学生時代に比べるとだいぶ情報の形がシャープになった。最近では無駄な情報に気を取られないようにフィルタリングする機能まで付いていたりする。

仕事の依頼が一件入っていた。ニューロン発火パターン解析の依頼のようで、データが添付されている。その上気前よく前金の振込までされている。しかもなかなかの大金だ。見るからに怪しい。前金を振り込まれているとはいえ契約したわけではない。もう少し調べてみる必要がありそうだがとりあえずは後回しだ。

違法警告情報がチラつくので開いてみると著作権侵害5、違法アクセス1、違法ダウンロード2、名誉毀損4が溜まっていた。窓の遮光度を切り替えながら弁護士ソフトを起動させ、演算処理にかける。結果は1つの違法アクセス以外はかなりの確率で無罪。残りの1つも有罪の確率が僅かに高いだけである。演算処理の結果は相手側のソフトとのやり取りであるから、結果は相手側にも行く。その情報を知った相手が少しでも可能性があるならばと考え、実際に提訴を起こす可能性があるわけだ。今回の場合相手は巨大資本コミュニティであるからそんなせこい真似はしないだろう。最近では犯罪検索ソフトの効率も上がってきているせいか、違法警告の数も多くなってきている。実際裁判を起こす気がなくとも示談金をせしめようとする詐欺まがいの連中から迷惑なメールが送られてくる頻度も高くなりかねない。今後最初期段階の裁判は仮想上でソフトウェアに処理させてしまおうという構想も持ち上がっている。この際だからより精度の高いフィルタリング機能をもつ弁護士ソフトに変えた方がいいのかもしれない。この際だからより高い知能構造を持った新世代型の弁護士ソフトに変えるということも検討に加えよう。

カーテンを開け、朝日を浴びると光を吸収しているような錯覚を覚える。実際に熱を吸収している面もあるだろうから間違いではない。この朝の朝の日光を浴びたとき脳に現れるパターンはどんな形をしているのだろうか。

クローゼットの中には相変わらずシンプルな服が並んでいる。白地や黒地でこれといった模様

はない。はっきり言って地味だ。その分材質にはこだわっており肌触りや温度管理に関してはバッチリだ。一目ではわからないが繊維内に3次元印刷された電子回路が埋めこまれておりデバイスの性能を増強してくれる。地味な服とは言ってもファッションに全く気を使わないというわけではもちろんない。自己タグARソフトを呼び出し鏡に映る自分の映像を同期させる。これで鏡に写る自己の像はARを重ねあわせたような形になる。そこに色々な服装のデータを映しだしていくのだ。すると鏡に映し出された姿はまるでその服を着ているかの様に見える。AR技術の発展に伴い、ファッションも実物から電子的なものへとシフトして言った。それとグラフィック/モデリングソフトの充実、デザインした服を掲載し場合によっては売買も可能なサイトの整備にともなってファッションをデザインする人間の裾野も広がり服飾や趣味の一環で服装をデザインするものが多くなった。さらに今まで材料的に、あるいは物理的に不可能だったようなファッションも可能となり爆発的にそのヴァリエーションを増やして言った。最近ではフリーのデザインも充実しており高い金銭を払わずともそれなりにいいデザインの服を着ることができる。無料のものであっても企業の広告塔になる必要はなくなったし、ブランドさえこだわらなければ衣服代は最低限で済む。だが最低限は必要だ。裸で外というのは季節によっては過酷だし、皆が皆視覚端末を付けているとは限らないし付けているからといってONにしているとは限らない。そもそも捕まる。顔をARデザインする試みが近年行われており、整形技術の進歩と相まって顔すらもファッション化していく日は近いのではないかとされている。

日替わりでレコメンドしてくれるような機能のインターフェイスもあり、面倒なときや時間がないときはそれですませられる。以前視覚情報過敏症の男と付き合っていた時はそれなりに気を使っていた。視覚端末をつけられないから仮想上のファッションは彼の目には映らない。だから実物の服も数を揃え組み合わせもあれやこれやと考えていた。それはそれで楽しかったのだけれども。

ところで今日これからの出掛ける先がその男のところなのだ。実物の服装は質素な物。別れたあとは未練も見栄もない気楽な関係になったというわけだ。

予約した乗合が丁度停車するところだった。大型ワゴンで先客は3人。席についたところでドアが締まり発車する。

車も個々の家庭が所有していた時代もあったのだと思うといささか驚いてしまう。こんな高価でスペースをとるものを個人や家庭単位で所有していたなんて。それに時々人を殺す。いまでもこそ全自動になったから事故なんて殆どなくなったけど昔は人の手で運転していた。交通管制システムも車両間の位置情報もなかったのだろうか。ともかく私には怖くてとてもできた真似ではない。

窓の外を見ていると隣の席の男と目があつた。男は穏やかな笑みをたたえ軽く会釈した。知らない男だと思うのだがとりあえず会釈を返す。が、男についた視覚タグを見てまずいと思う。真理協会の伝道者だ。最近乗合での布教が増えていると聞いていたが実際に目にすることになるとは……。男は私の会釈を合図にタグを拡張しなにやら映像を流すとともに口を開いた。

「あなたは神を信じますか？」

真理協会は最近台頭してきた新興宗教で米州の保守系カトリックの神父だった男が創設したものだ。創設自体十年とたっておらずその拡大は爆発的で米州では社会問題にまで発展している。たびたび保守系カトリックやユダヤ教と衝突している。

「いえ、そういうの興味ないんで」

すぐさま男の視覚AR情報をシャットアウトするが男はしゃべりをやめようとしなない。さすがに男自体消すことはできない。

男は私の言葉など聞こえない様子でしゃべり続けている。目が見開いて顔は変に紅潮し硬直しはじめ狂気の色が浮かんでいる。

「神は存在します。神を信じられないというのは神を感じられないことが原因なんです。現代の人間は科学という毒にまみれ神を感じるすべを失ってしまったのです。一昔前の神父ならばこの毒され堕落しきった世界を捨てもう一度神と向き合うべきだと説法をいっていたことでしょうか。しかし彼自身神を感じる事が出来ていたのでしょうか。残念ながら答えは否でしょうか。努力して神を感じようとしてもそれができなかった。何故でしょうか？努力する方法が間違」

「ほんと興味ないんでやめ」

「方法さえ間違えなければ現在の世界を否定する必要などないのです。この毒された世界でも神を感じることができるのです。そしてわれわっと失礼失礼。いつもこうだ。つつい話に夢中になってしまう。この間注意しろと言われたばかりなのに」

やっと通じたか。それにしてもひとりでよくしゃべるものだ。

「私こういう者です」

男はにこやかに笑っているだけだ。こういう者と言われても...と思って男の情報をシャットアウトしていたことに気づく。きっと連絡先だとかそう言うのをタグに表示させているに違いない。

「あ、はい。どうも」

「興味があったらご連絡ください。興味がなくともご相談事などあれば何でもお伺いたします」

誰が連絡などするものか。

手を振る男にひきつった愛想笑いで会釈する。もう二度と顔も見たくない。

何でああも宗教を信じてるやつは熱狂的なのか。でも考えようによってはベクトルが異様に宗教に向かっているだけなのかもしれない。度が過ぎたバンドの追っかけやサッカーのサポーターのようなものだ。まあ、どっちにしろあまり関わりたくないことには代わりがない。

雑居ビルの五階、オフィスに向かう。セキュリティもなく地震が来たら崩れるんじゃないかと思うほどボロボロだ。そんな建物の中に居を構える会社が今回のクライアントだ。会社と言っても社員は3人でできたばかり事業内容も実験的なものだ。目下のところ仮想的な教育システムの構築を目指しているらしい。

「ちょっと違うかな」

「どう違うのよ」

先述の元彼が3人のうちのひとりで本人曰く技術的なアイデアは彼のものらしい。

「仮想ってのは仮想空間上で授業とか訓練を体感するっていう理解だろ？つまりリアルタイムで脳味噌と処理系とのやりとりがあってその都度体験が、記憶が形成されていくってわけだ。そんな他の会社でも作ってるし、今更はじめたってでかい商売はできん」

「はいはい」

「はいはいって……。俺らがやろうとしてんのはな、そういうリアルタイムの仮想体験じゃない。予め記憶を作るんだ。体験したっていう記憶を作り出して、それをユーザーの脳に記録するんだ。ユーザーは実際に体験したのと代わりがない記憶が残るし、ユーザーにとっても時間の節約になる」

「あー、そんなんだっけ。でも脳への知識記憶の注入はあまりうまくいっていないんじゃない？結局すぐ忘れるんじゃないかっけ？」

「そこでお前の技術が必要ってわけさ」

彼はしたり顔が鼻につく。付き合っている頃ならば可愛気も感じたかもしれないが今は無理だ。「お前の技術」というのは正しく私の仕事だ。もっと直接的に言い換えれば私への依頼内容である「達成感」のデザインだ。彼の理論では訓練などの知識をうまく脳に刻み込むためには「達成感」がどうしても必要らしい。

「今の技術じゃ表面的にしか知識記憶を注入することができない。それを自分のものにする、記憶を強化するためにはどうしても反復が必要だろ？でもまあ、大抵の場合記憶を入れてやっただけじゃ反復なんてしねえ。そこで、反復なるような仕掛け、ドラッグが必要だってわけだ。それが「達成感」わけよ」

「ドラッグって、それ問題だよ」

「もちろん客に言ったりはしないよ。でもそういうもんだろ。苦しい練習でも何でもその後の達成感で皆いい思い出だし、成功体験に置き換わる。そしていい思い出は何度でも思い出す」

「実際、そういう体験を作れないの？達成感を覚えるような」

「いやあ、そりゃ理想的にはユーザーの脳を読み込んでそれをスパコンで処理して実際に体験したのと寸分たがわぬ記憶を作るのが最高だ。だがそんなもん現行の技術じゃ無理だし、バーチャル体験させたほうがだいぶ安上がりだ。完璧な体験の記憶を作ればいいんだらうけどさ。効率的じゃないよ。記憶なんて極論すればほとんどあとから勝手に作ってくもんだよ。効果は上がったって劇的じゃない。費用に見合わない効果なんだ。体験に感情？あ、お前は「感覚」っていつてたっけ？そういうもんをいちいち入れるってのは、情報量が膨大すぎるだろうし、お前を儲けさせても俺らは損しかしないよ」

「でもさ、達成感だけでそんなにうまくいくかな」

「うまくいくまでトライアンドエラーさ」

私は感覚デザイナーを名乗っている。デザイナーと格好をつけて名乗っているが、そんなアーティスティックな仕事をしているわけでもない。ここでいう「感覚」というのは視覚、聴覚、触覚といった感覚ではない。そういう感覚をデザインする人間もいるが私のやっている感覚は、

どちらかと言えば「感情」「情動」「気分」に近いかもしれない。私に言わせればそのどれでもない。私の「感覚」はそれほど確固としたものではなくもう少し移ろいやすく臆気な、その前段階のようなもの。状況の中に身を置いてはっと知覚される感覚だ。例えば夏休みが終わり近づいたときの夕日を見たときに感じる物、思い出すことのできない悪夢から目覚めた直後の不快感。とは言ってもそんな不確かなで食っていけるわけがなく大抵の依頼は単純な情動や気分のデザインだ。

デバイスから脳に電気信号を伝え、感覚を呼び起こす。ただそれを無闇矢鱈にやった所ででたらめな感覚が出てくるだけだ。どういうニューロン発火パターンのネットワークを脳に作り出すか、それが重要となっていて、求めるものは人によって微妙に違う。そのパターンを設計・デザインするのが私の仕事と言うわけだ。

仕事の方法は主にパターン解析。まずは主な主要素となる感覚のニューロン発火パターンをネット上のパブリックライブラリから取得する。このパターンは個々の瞬間的には三次元的なパターンであるとともに経時的变化が加わるので4次元的な解析が必要になってくる。単純な感覚、例えば単純な「怒り」や「悲しみ」を想起する前段階的感覚、はライブラリ上の膨大なデータを解析して得られた共通成分をそのまま使える。もちろん私の仕事はそれで終わってしまうほど簡単ではない。もっと複雑な、先ほど行ったような微妙な感覚をデザインするのだ。当然夏休みが終わりに近付いているときの感覚のニューロン発火パターンなんてものは企業でも大学でも研究対象になることもないからライブラリには存在しない。私自身が体験するにも小学生に戻る魔法は持ち合わせていない。そこで自分自身とバイトの被験者を使った試行錯誤が開始される。ライブラリ上の感覚をソフトウェア上で組み合わせていく。ここは長年の経験と感覚がモノを言う。自慢ではないが感覚パターン解析と組み合わせのセンスは業界でもトップクラスだ。そしてそれらしきものができたら実際に自分に使って確かめてみるのだ。そこからまた改良をはじめ、バイトで雇った被験者に体験してもらって意見を聞く。さらに改良し、その後はクライアントとの詰めの作業に入っていくという寸法だ。

私の作った感覚のテストをする。感覚はデバイスを使って電氣的な刺激を使って脳にそのパターンを作り出す。

「どうだった？」

「今日の服の色は……赤か」

「え？治ったの？」

私の驚く顔を見てもったいぶった感じでニヤニヤと笑っていやがる。

「視覚デバイスじゃないんだな。直感デバイス」

むっとしたのが顔に出ていたか彼は慌てて答える。

彼は視覚情報過敏症を患っている。視覚情報過敏症は視覚デバイスから流れる過剰な映像刺激にうまく適応できず、めまいなどの症状を起こしてしまう病気だ。AR一拡張現実が過度に発展している現代ではかなり不便な病気だ。

そんな彼が言った直感デバイスとは視覚や聴覚といった擬似的なものを介さず、直接的に事実

を認識するというものだ。例えば視覚デバイスの場合網膜上に文字が映し出されている映像を脳が認識し、それを意識はそれを見ていると感じる。主観上は目の前に文字が映し出されているのだ。しかし直感デバイスの場合網膜上に文字が映しだされていることを知る。主観上は目の間には文字など流れていないにもかかわらず、そうだと知るのだ。

「聴覚と感覚は問題ないからそのままだけど視覚だけ直感デバイスをつけてみたんだよね」

「どうなの？」

「まだなれない部分はあるけどおもしろいよ。いままで知らなかった世界と出会った感じ」

直感デバイスはまだ実験的な部分もあり使っているのはまだまだ極少数だ。だが、次の大きなインフレ技術として期待されている面がある。

「ふーん。ま、それは置いといて、感覚の方は？」

「うーん。もう少し、こう、やったぜっていうかよっしゃ！っていうか、そう言うのがほしいかな」

「高揚感？」

「そう！それ！」

「だめ、これでも規制ギリギリなんだから。これ以上やると脳内麻薬規制法に抵触しちゃうし、そもそもそこまで高揚感ないでしょ勉強終わった後って」

「いやあ、出来ればドラマティックな記憶も加えたいかなって」

「社員教育とか体験訓練とかの教材でしょ？そんなに必要かな？」

「感動は大きいほうが記憶に残るでしょ」

「まあ、試しては見るけどあんまり期待しないで欲しいかな」

「期待してますよ。期待の新星なんて言われてるじゃない」

そう言って彼はまたニヤニヤと笑っている。ムカつく。

*

「ねえ、大切な人が死んだ時の感覚のパターンってどんなのかな」

「悲しいとか、悔しいとか？」

「ううん。それもあるけど...なんていうのかな、世界と切り離された感じ」

「世界と切り離される？死んだのが信じられなくて嘘の世界にいるみたいだとか？」

「うーん。近いけど違う。2年前におばあちゃんが死んだ時なんだけど、何か、世界が欺瞞だらけに見えたの。おばあちゃんが死んで私の世界にはぽっかりと大きな穴が開いたのに、世界はいつも通りなの。私の世界は変わったのに、外の世界はなにも変わらない。それがどうしても信じられなかったの。いつものように楽しそうに笑う人たちが信じられなかったの。世界はこうも変わってしまったのに何で笑ってられるのかどうしても理解できなかったの」

「現実にうまくコミットできなくなった状態？」

「そんな感覚。そんな感覚ってどんなパターンなのかな」

「さあ、複雑そうだね。でも例えば何かの陰謀を自分だけが知ってしまった感覚とかと似てるか

もね」

「そうかな。ちょっと違うような気もする。何て説明すればいいんだろう」

「言葉にするのは難しいかもね」

「私が死ねば分かってもらえるかな」

「できれば分かりたくないね」

「あなたが死ねば私がもう一度味わえる」

「勘弁してよ」

*

ソファで目を覚ます。いつの間にか寝ていようだ。目覚め間際のまどろみの中、虚ろな感覚を楽しむ。現実が溶け、夢と混ざり合う。あるいは夢をいれた容器が溶け出して現実に希釈されていく。次第に薄く薄くなっていくまどろみの繭を打ち破って私は目覚める。

すっきりというわけでもないが、それでも自然に目をさますほうが好きだ。出来れば目覚ましタイマーなどに頼らず自然に目を覚ましたいものだと思うのだが、それに向けて努力する気も無い。

気だるさを押し切ってインターフェイスを開き、朝の依頼をチェックする。依頼人の名はアクィナス・ガザーリー・レヴィ。ずいぶんと辺鄙な名だ。偽名だろうか？疑いすぎかもしれない。オンラインでは本名での契約も珍しくなってきた。しかし解析如きにこんな大金を提示するものだろうか？

念のため依頼者の名前を検索してみる。意外にもあっさりとその名は出てきた。

真理教会の教祖の名だ。

丁度その時、電話の着信が入った。視界上の電話マークを選択する。着信は依頼人から。あまりにもタイミングが良すぎてどきりとする。唾を飲み込んで通話を開始する。

「もしもし」

男の落ち着いた声だ。同時通訳された合成声だろうが本人の声を再現したものであるはずだ。

「あなたがアクィナス・ガザーリー・レヴィさんですか？」

「ええ。そうです。お顔を拝見したいのですがよろしいでしょうか？」

「あ、はい」

視界上に相手の顔を表示させる。

30代の北欧系のコーカソイド、整った顔立ちだがどこかぱっとしない。ニュースか何かで見たことのある顔だ。宗教的な服装をしているかと思ったが地味なスーツ姿だ。

「どうも声だけでは窮屈に感じてしましまして。依頼の件ですが引き受けていただけますか？」

「検討中です。正直、迷っている所です」

「それは我々からの依頼だからですか？」

「まあ……、そうですね。あまりあなた方のような団体から依頼を受けた事が無いもので」

アクィナスは苦笑しながら言った。

「正直におっしゃってくださって結構ですよ。胡散臭い、と」

「いえ」

「かまいませんよ。わたしはこれでも客観的に自分たちをどういうふうにみられているか分かっているつもりです。わたしがあなたの立場ならまず快くは引き受けない」

本当にこの男は宗教的な指導者なのだろうか。今朝の乗合であった信者とはまるで違う。狂信性のようなものがまるで感じられない。まるで、科学者や懐疑主義者のようにすら感じる。

「あなたは……」

本当に神を信じているのですか。思わずそう聞いてしまいそうになったとき男の口から思わぬ言葉が漏れた。

「私は元々神など信じていなかったのです」

まさかの告白だ。今最も勢いのあるとっていい宗教の教祖が口走った言葉とは思えない。

「親が熱心なキリスト教徒で、父親は牧師でした。私は父親に言われるがまま神学校へ進み父の跡を継ぎました。キリスト教の教師になったあとも、私は本当は神など信じていませんでした。それでも努力はしたんです。宗教はともかく職業に対しては誠実であるべきだと思いましたが。ですが調べれば調らべるほど、神の痕跡は立ち消えていき、考えれば考えるほどこの世界には神など必要ないように思えてくるのです。それでも神を信じられるような根拠を求めてイスラムだろうが仏教だろうがかまわずに世界中の文献を読み漁りました」

アクィナスは口許に自嘲的な笑みを浮かべながら語る。

「結局、神を見つけることは適いませんでした。神職を辞めてしまうことも考えました。神父の仕事自体は好きでした。人に対して話を語り、教会を運営し、地域の共同体の中で中心的活動をする。私が神を信じられないでいる一方で、私は神を信じるものを増やしていきました」

「何故、私にそのような事を話されるのですか？」

「ご懸念のとおりあなたの警戒を解くためということもありますが、たまに話したくなるんです。自嘲癖があるのかも知れない。こんなふうだから神を信じられなかったのかも。あ、申し訳ない、ご興味なければやめますが」

だいぶイメージとは違う。もっと、なんと言うか宗教の指導者と言うのはもう少し熱狂的か、もう少し大きく構えた人間をイメージしていた。なんと言うか目の前の男は、奇妙な正直さがあり、そしてペシミストのようだ。

「いえ、正直興味あります。それに今回の依頼と関係あるのでは？」

「あ、そうでした。関係はあります」

「まさか、神を信じられるようにして欲しいとか？いや、でも依頼は解析ですよ」

「ははっ、おもしろいですね。そんなこと可能なんですか？」

「今の技術では無理ですね。ですのでそのような依頼だとするとお引き受けすることは……」

「いえ、もうその必要はないんです。私は神を信じていますから」

「でも今」

「かつては、信じられなかったのです。ですが今は神を信じています。確かに神が感じられるの

です。先程の話の続きですが」

アキナスはある日突然、神が正しく感じられるようになったのだという。誰かの話をきっかけに信じるようになったとかそういうものではない。感じられるようになったのだという。姿が見えるわけでも、声が聞こえるわけでも、肌で感じるわけでもない。だが、たしかにそこに、そこら中に神が満ち溢れているのを感じるのだというのだ。

「自分でも気が狂ってしまったのではないかと思いました。ですが、そんな気持ちは直ぐに消し飛んでしまうほどに新しい世界が顔を覗かせたのです。澄み切った、生の世界とでもいいでしょうか。急に靄が晴れた、そんな感じがしましたよ」

男の恍惚とした表情に身を硬くする。ついに宗教者としての本性が現れたのだと思った。しかし次の瞬間には男の表情はもとに戻っていた。

「そうして、私は神を信じるようになったのです」

アキナスの体験はよくある宗教妄想の類だろうか。側頭葉癲癇患者や神の啓示を受けたと主張するものが脳の同じ部位に損傷を受けている事があるという。統合失調症の症例の一つでもあるが、熱心な宗教家ということ意外は一般の人とは見分けがつかないという。この男も頭をうつか何かしたのではないだろうか。

「神を信じられるようになってから私は以前よりも精力的に仕事をこなしました。そしてこの感覚を皆と分かち合いたいと思いました」

「それで今回の依頼ですか？妄想……いえ、あの、失礼。信仰のような、そういった感覚パターンを作り出すのはかなり高度な技術が必要で、先程も申し上げたとおり、現行では無理だと思いますが……」

アキナスはキョトンとした顔をしたあと、静かに笑った。

「いえ、そうではないのです。皆とは、分かち合う事ができましたから」

「と申しますと？」

「皆も神を感じる事ができるようになったのです」

ある日の説教の事だったという。アキナスはいつものように教会で説教を始めた。ただ、今回ばかりはいつも違う趣向も凝らしていた。何とか神を感じた感覚を伝えようと、音と映像を駆使した説教を行ったのだという。一通り説教を終えたとき信徒たちから歓声があがった。そして言ったのだ。「私にも神が感じられる」と。

「つまり、あなたの説教で信者の方も神を信じられるようになったと。まるで、言い方が悪いですが……伝染したかのよう」

「伝染。そうかもしれません。まるで伝染するかのよう、神を感じるものが増えていったのです。それで、解析して欲しいのは私と、信者数名のパターンなのです」

アキナスの話をして信じたわけではなかった。神を感じられるようになった、ということまではよしとしよう。アキナス一人の脳に異常が起きれば生じうる話だ。だが、他のものまで感じられるようになったというのはどういうことだろうか？集団ヒステリーだろうか。だが、その後神を感じられるようになったという。精神的な原因があるのだろうか？

依頼は引き受ける事にした。依頼の内容に興味があったのも一つあるが、男自体にも興味湧いたのが主な理由かもしれない。

解析ソフトを立ち上げ、依頼のデータを処理していく。生データが加工されそれぞれのニューロンの発火頻度や他のニューロンとの接続具合によってコントラストや色分けされた動画が表示された。いつも見ているもの以上に複雑だ。側頭葉を中心に網目が脳全体に行き渡り、絶え間なく変化している。パッと見ではわからないが4次元的なフラクタル構造を持っているようだ。収縮したかと思えば何かをきっかけに再び広がっていくパターンだ。完全な再現ではないが骨格のようなものは常に保たれている。それはまるで、生き物のように、生まれ、成長し、子を産んで死ぬ。見れば見るほどその思えてくる。

本当に生き物なのでは？

そんな考えが頭に過ぎる。脳の中で繰り返し生じるパターン。人間の脳に寄生した電気信号で形成される生き物。脳を住処にしたそいつはついに他の脳へ移動する手段を見つけ、増殖を開始する。

まさか、そんなわけ。

頭の中で否定の言葉が発せられ続けるのだが、目の前ではパターンが生成と消滅を続けている。これだけならば生き物ではない。波のようなものだ。だが、本当に人に伝染していくとしたら？私は呆然としながらそのパターンを見続けるしかなかった。

アクィナスは依頼した理由をただの好奇心と言い切った。

「失礼ですが、パターンを解析する理由をお聞きしても？まさか、神の存在証明ができるとでも」

「いえ、単なる好奇心です。私個人の」

「はい？失礼。それだけですか？それだけのために、これだけの大金を」

「大金なのですか？すみません。こういったものの相場がわからなくて、最近は教会の運営も私は直接関われないでいますし」

「いいですね。楽に儲けられそうで」

「儲けようと思えば、そうかも知れませんね。ですが、これは私個人のお金です」

「個人のとは？」

「以前は副業もしていたのですよ。牧師だけでは家族は養っていただけませんでしたから」

「商才があったのですね」

「不幸なことに」

ここに来て一つの疑問が湧いた。何故私なのだろうか？もっとこの手の解析に適した企業や個人解析者は多くいる。

「何故私に依頼をされたのですか？」

「ええ、特に理由はないのですが、神の思し召しとでも言ったら罰当たりでしょうかね」

アクィナスは依頼した理由をただの好奇心と言い切った。彼が言うには、あれほど信じられ

なかった神が何故信じられるようになったのかそれを知りたいのだという。そして何故信者たちにまで神の存在を感じさせられるようになったのかを。その原因を知ったからといって何をしようというわけでもなく、ただ知りたいのだと。

「好奇心は人一倍でして、だから逆に神を信じられなかったのかもしれない。私は科学者に向いていたのかも知れない」

そう、アキナスは言った。その言葉が嘘とは思えなかったし、私自身、神のパターンとやらに興味を示しつつあった。私はこの仕事を引き受けることにした。

他の仕事を忘れてしまうほどに私はそのパターンに没頭した。不可思議で、魅力的なパターン。この特異なパターンを解明することは名声につながるかも知れないという気持ちも無いにはなかったが、それ以上に純粋な好奇心が大きかった。

神を信じてしまう感覚。

そして何故か伝染するように広がったその感覚。

いったいその感覚はどのようなものなのか。

どんな、感じが、するのか。

目の前に繰り上げられる四次元的パターン。明滅する色彩。接続と断絶のネットワーク。

私は繰り上げられるその光景にいつしか魅了されていた。

アキナスのパターンの他、信者数名のパターンも解析した。此処にバラツキはあるもののパターンの骨格となるようなものは同じであることが長年の経験から分かった。

彼らは同じパターン、つまり同じ感覚を共有している。感覚というのは個人的なものではあるが、骨格となるものはある程度共通のものとなる。そうでなければ私の仕事は成り立たない。しかしながら、四次元的に生成と死を繰り返すような複雑なパターンが共通性を持つことは珍しい。少なくとも、感覚という領分においては。これは過剰なまでの相似形だ。

本当に伝染しているのかも知れない。

そんな馬鹿な考えが私の頭をよぎる。

神を感じる感覚が伝染するなんて馬鹿げている。

よりによって、怒りや悲しみでもなく神だなんて。

神なんて。

その時だった。

あまりにも唐突に訪れた感覚に私は呆然と周囲を見渡す。

これは？いったい？

世界から切り離され別の場所に立たされた感覚。

何か、とても圧倒的な大きな存在を感じる。

畏怖？ぬくもり？

渾然となった感覚の潮流に私はどうすることも出来なかった。

私にはその感覚をこう形容することしか出来なかった。

神を感じた、と。

姿が見えるわけでも、声が聞こえるわけでも、肌で感じるわけでもない。だが、たしかにそこに、そこら中に神が満ち溢れているのを感じるのだ。そう、直感的に感じられるのだ。五感以外、あるいは分割不能な総合的感覚を以てして、直にその存在が感じられるのだ。それも以上なまでにリアルに。

まさか、本当に伝染するなんて。

私は今起こった出来事と、そして今も続いている状態に困惑したままだった。

私は頑固な無神論者などではなく、どちらかと言えば不可知論者だ。

だから神を信じるに足る根拠さえあれば、私は神を信じるだろう。だが、今のこれは違う。何の根拠もない。何の理論もない。ただ、突然神を感じられるようになったのだ。神は確かに存在する。私自身の存在と同じくらい、確かに感じられる。

頭では神などいる証拠など無いと信じていながら、神がそこにいるのを感じるのだ。

宗教妄想のたぐいだ。神はリアルにその存在を感じさせるが、リアルさすらも脳が感じる感覚にすぎないのだ。脳が何らかの影響を受けたに違いない。原理はわからないが何らかの催眠術か、もしくは何か道具を使われたのかも知れない。それで宗教妄想を抱くようにあったのだ。

不可思議にも神はいないという信念と、神の存在を感じるという感覚が同居している。

これには驚いた。

神を感じてしまうというのはもっと熱狂的に宗教に傾倒していくものかと思っていた。

ただ神の漠然とした存在を確かに感じてしまうだけだ。

信念が変わるわけではない。既存の宗教の教義を信じるようになるわけでもない。

何かが大きく変わるわけではなかった。

「こんなパターン、見たことない。まるで生き物みたい。あえて言うならてんかん患者がうける啓示妄想のパターンに似ているかもしれない。それにしてもだいぶ快樂信号が出てるわね」

師である感覚デザイナーに意見を求めると、そんな答えが帰ってきた。プライバシーという面では問題のある行動かもしれないが、彼女は口が硬いので漏れることはないだろう。

それでも自分が神を感じられるようになったことは伏せておいたのだが。

「快樂信号は出ているパターンと、そうでないものがあります。快樂信号が出ているのは熱狂的な信者みたいですね」

「だとすると、自分の信仰と感覚が一致しての歡喜、ってところなのかもね。それにしてもここまで複雑と私の手には負えないは」

それはわかっていた。私の実力はすでに師を超えているという自負もあった。だが、キャリアの違いはある。何か私の知らない突破口があるのではないかと思ったのだ。それも当てはずれ、私はそのままを報告するしかなかった。

結局あのパターンが何なのか私には解析しきれなかった。本当に伝染するのかも、何故「神」を感じるようになるのかも。

「申し訳ありませんが、ご期待にそえるような解析はできませんでした」

「かまいませんよ。そう簡単には行かないでしょう。こういったものは」

「まさか、神が作ったでもおっしゃられるのですか？」

「さあ、神のみぞ知るといったところでしょうか」

アキナスはそう言って笑った。とても新興宗教団体のトップとは思えない無邪気な笑いだ。

「これを、どうなさるおつもりですか？」

「どう、とは？」

私は神を感じたことを語った。そして、今も時々それを感じることを。

「危険だとおっしゃいますか」

「いえ、危険というわけではありませんが」

「私にはわからなくなりました」

ふと、彼が失望と後悔が入り混じったよう複雑なものを感じていることがその表情から読み取れた。彼は何かを吐き出すように喋りだした。

「神は確かに感じられる。だが何かを語るわけではない。何の真理も語らない。真理教会だなんてお笑いですね。神は感じられても何も言わないんですよ。誰の教えを信じよとも。何も言ってこないから人間が勝手に考える事には代わりが無いんです。神はたぶん、祈られることも、信じられることも別に望んじやいないのかもしれませんが。ましてや、神が何なのか、神が何を望んで居られるのかなど到底叶わぬのです」

彼は立ち上がると、私ではない誰かに語りかけるようにいった。

「私は、神について語ることをやめます」

その後、真理教会のトップ、アキナスが突然消えたというニュースが流れ、私の口座には約束通りの金額が振り込まれていた。アキナスは敵対の団体に暗殺されたのではないかという噂もネットに流れたが、私は彼が自ら姿を消したのだと思った。彼は疲れてしまったのだ。ようやく見つけ出した想い人がこちらを見向きもしてくれないことを悟って。盲目に愛することもできただろうが、それが正しいことなのか彼は疑念を持ってしまったのだろう。彼は頭が良く、物事をいろいろな角度から見るタイプの人間だ。おそらく自ら死を選ぶような真似はしないだろう。なんとなく、そう思った。

あの感覚が何だったのか未だにわからない。確かにあの時、神が確かに感じられたし、今でも時々それを感じるができる。神は確かに存在するという感覚はある。

それでもやっぱり、私は神の存在を信じることはできない。

直感的な感覚と、論理は違うのだ。

私はそんな矛盾に悩まされるようなタイプの人間ではない。

ただ、何故、神を感じられるようになったのかという不思議さだけが私の心を悩ませ続けている。アキナスがわざわざ私を洗脳するような真似をしたとは思えない。したとしてもそれは無意識からのことだろう。

彼の語る言葉があるいは伝染の鍵なのかならうか。

多分違う。

鍵になるのはあのパターンだ。

もう一度アキナスの感覚パターンを目の前に視覚デバイス上に投影させる。
四次元で明滅するパターン、映像、そして音。

アキナスは映像と音を使った説教をした時、信者は神を感じるようになったと言っていた。私も映像的な解析ではなく、音を使ってリズムにする解析も行なっていた。解析ソフトは奇妙な音楽を奏でていた。

例えば音楽や言葉は時々不思議な感覚を呼び覚まさせる。それは思い出という姿を借りて現れることが多いが、共通の文化圏では共通の感覚を想起させることもある。そういった外界からのパターンによる刺激は脳の中に言いようのない感覚のパターンを作り出すのだ。

それらの複合的なものが脳に神を感じるパターンを作りだしていくのかも知れない。脳の中に別々に想起された音、映像、それらの「感覚」パターンがつながって連携したパターンを創りだしていくのだ。そして、そのパターンを持った人間は「作品」を作り出し、他者へとパターンを伝染させていく。乗合の中で遭遇した布教者のように。

まるで、人間を宿主にした寄生虫のように。

神の妄想を抱かせる寄生虫。

神の使いの蟲。

寄生虫はやがて文化の隅々にまで行き渡り、その数を増やしていく。その過程で寄生虫は様々な進化し、複雑化し、分化する。それは様々な国で様々な宗教となり、新たな宿主を獲得するため、他の寄生虫と対立し、争うようになっていく。一人の人間が産み出した寄生虫が、世界を覆う。やがて何らかの原因で寄生虫は死に絶えた。だが、ある神を信じられなかった男が世界中の宗教の情報を漁るうち、その寄生虫は再び.....。

ぞっとしない考えに思わず頭を振って、カップにコーヒーを注ぐ。

パターンが寄生虫だなんてあまりに悪趣味だ。パターンがあまりにも生物のそれに似ていたから連想してしまったのだろう。

伝染ではなく、感覚の共有と言ったほうがいいたろう。言葉はこれだから嫌いだ。感覚を変な方向にねじ曲げたりする。

コーヒーをすすりながらニュースサイトの映像をぼんやりと眺める。

あれから数ヶ月、以前にまして宗教に関するニュースが増えた。宗教に帰依する人間が急増しているらしい。

伝染が広がっているのかも知れない。

悪趣味な冗談だが、それが本当に悪いことだろうか？

神の感覚は決して悪いものではなく、むしろ安心さえ覚えられる。

皆がひとつの神を感じられるようになれば、世界はひとつになれるのでは？

それが信念を変えるものではないならば、科学の発展を妨げるようなものではないはずだ。そうだ。世界は良くなっていくのだ。

だがふと、あのアキナスの悲しげな顔が思い出される。

「神は確かに感じられる。だが何かを語るわけではない。何の真理も語らない。真理教会だなん

てお笑いですね。神は感じられても何も言わないんですよ。キリストを信じよとも、ムハンマドを信じよとも。何も言ってこないから人間が勝手に考える事には代わりが無いんです」私は思わずコーヒーカップを取り落とした。

信念は変わらない。

そうだ。

皆同じ神を信じるわけではない。

宗教は皆教義が違い、中にはとんでもないものもある。

もし、彼らが本当に神を信じられるようになったら？

そして、その信念がよりいっそう強固になるとしたら？

ニュースから流れる映像に神のパターンが紛れ込んでいるような気がした。

外の世界の雑踏の音に神の音楽が聞こえてくるような気がした。

壁にかかったカレンダーには神の数字が浮かんでいる。

神のパターンはそこら中に潜んでいて人間に寄生する機会を伺っている。

デバイスの流す情報の中を神の使いが蠢き、駆け回っている。

神がそこら中にいる。

だが、神は黙って、ただいるだけ。

ただ存在するだけ。

何も人々には指し示さず、人々の言うに任せ、するに任せる。

たとえ人々が神のために殺し合い、世界が血に染まろうとも、神はただそこに存在する。

私は言いようのない感覚に襲われた。

それはとても恐ろしい感覚だった。

はじめて底しれぬ恐怖という感覚を知った。